ガンダーラとバーミヤーン
―文化交流のダイナミズム―

宮治昭

ガンジス中流域で興った仏教は、一千年紀の間に（１）ガンダーラから陸路中央アジア・東アジアへ、（２）西・南インドから海路スリランカ・東南アジアへ、（３）西北・北インドから陸路チベット・中国へ、の三つのルートでアジアに広まった。

本発表はパキスタン北部のガンダーラとアフガニスタン中央部のバーミヤーンという、インドから見ればローカルな二地域で、一千年紀に中央ユーラシアで起こったグローバルな文化交流によって、仏教美術にダイナミックな変容と再生がもたらされた、その様相について考察する。

仏教はキリスト教より 500 年ほど早く、釈迦の初転法輪（初説法）によって成立し、その美術は前３c のアショーカ王柱に始まるが、前２c 末頃から仏塔（ストゥーパ）の荘厳としてインド内部で本格的に興起する。仏塔は釈迦の「涅槃」（死）の象徴であるが、舎利を祀ることによって「生ける釈迦」の象徴ともなり、仏塔の門や欄楯に本生図や仏伝図が表されたが、仏陀は聖樹・聖壇・法輪・仏足跡などによって象徴的に表された。仏塔はインドでは仏教の終末期（13 c 頃）まで信仰の中心として機能する。その形体は舎利を祀る丸い覆鉢（母胎と同一視）と、中心に設置される柱（宇宙軸と同一視）・平頭・傘蓋が重視され、須弥山世界観とも重ね合わされ、層を成す天上世界（四天王天・忉利天・夜摩天・兜率天・楽変化天・他化自在天・梵天など）のイメージとも混淆した。

中央アジアから西北インドに目を向けると、前６～５ c のアケメネス朝ペルシアの支配、前４ c のアレクサンドロス大王の東征以降のギリシア文化の移入があり、そしてオクサス流域からガンジス流域までを支配した、イラン系遊牧民族のクシャーン朝（後１c 中～３c 中頃）において、ローマ帝国と中国との陸路と海路の東西交易による経済的繁栄を背景に、インド、イラン、ギリシア・ローマの三世界の宗教文化が並存し、また混淆する。とりわけ広域ガンダーラ地域において、仏教美術はこれら三世界の文化を融合し統合して、インド内部と異なる豊かな仏教美術が興隆する。ガンダーラ美術はその後のクシャノ・ササン、キダーラ支配下の 5 世紀頃まで存続する。

広域ガンダーラでは仏塔は方形基壇をとり、円胴部・覆鉢・平頭・多重の傘蓋をつけて上昇性を強め、層を成す天上世界のイメージと深く結びつき、天上の神々との交流を物語る仏伝説話（灌水・梵天勧請・降魔成道・四天王奉鉢・三道宝階降下・帝釈窟説法など）が好まれ、死後の生天信仰も惹起した。仏塔の階段・方形基壇・円胴部・覆鉢正面・平頭には浮彫彫刻が取り付けられ、全体として仏教世界観が表された（但し断片的に出土し完存するもの

はほとんどない)。それらの彫刻の特徴として、（１）人間的であると同時に、超人間的な仏像の創始、（２）仏伝説話の愛好（130 場面ほど）と「釈迦の生涯」という伝記的な仏伝美術の誕生、（３）過去・現在・未来の仏陀、特に最初の過去仏というべき燃燈仏、未来の仏となる弥勒菩薩の図像の確立、（４）前述の三世界を出自とする多彩な神々[守護神]（仏伝浮彫中、あるいは単独像)、およびそれらの装飾文や図像モチーフが挙げられる。

ガンダーラ美術はインドのバラモン教と新興のヒンドゥー教の土壌の中で生成した仏教が、ギリシア・ローマ、イランの宗教文化を吸収して成り立っており、上記 (4) 以外には、その融合の様相を分析するのは難しいが、大略以下のようにいえよう。ギリシア・ローマ美術の寄与は、仏・菩薩・神々を人間像で表す神人同形主義（anthropomorphism)、”写実的な”造形、伝記的仏伝表現、に見られる。一方、イランのゾロアスター教は、全世界を支配し平和で豊かな楽園を実現する理想的な帝王たる転輪聖王神話（バラモン教の馬祀祭と融合して成立）に寄与し、法輪をまわす（説法する）釈迦と金輪をまわす転輪聖王のアナロジーを生み、三十二相を有し、光り輝く超人間的な仏陀の造形（バラモン教を受容した仏教の身体観や瞑想実践と融合）に影響力をもった。ガンダーラ美術は中央アジア美術の基層を成すと同時に、主に陸路によって後漢～北魏時代に伝えられ、初期中国仏教美術の基と成ったが、中国独自の改変も顕著である。

ガンダーラ美術が衰退する 6～8c 頃に、ヒンドゥークシュ山中でバーミヤーン美術が隆盛する。エフタル・チュルク（突厥）の時代で、後期～後ササン朝、後期～後グプタ朝、中国南北朝後期～隋・盛唐期に当たる。バーミヤーンでは二大仏（2001 年に爆破)、700 以上の石窟群、野外寺院などが造営された（630 年頃に玄奘、727 年頃に慧超が訪れ繁栄を伝える)。とりわけ東西の二体の巨大な大仏立像は天に向かって聳え立つ柱のようで、バーミヤーンの記念碑的な存在である。高さ 38ｍの東大仏（６ｃ後半頃）はガンダーラ仏を形式化した造形の釈迦仏で、仏龕天井にはインド、ギリシアの図像を取り入れた天象モチーフを周囲に配した、イランの太陽神ミスラが描かれた。この壁画の主尊がミスラであることはゾロアスター教の聖典『アヴェスター』「ミフル・ヤシュト」の記述、ササン朝印章の図像、ソグド人の中国の墓から出土したゾロアスター教の世界観を表した浮彫図像などから証される。

一方、高さ 55ｍの西大仏（7ｃ初め頃）はマトゥラーの後期グプタ様式を受容した下生の弥勒仏と推定され、仏龕天井には壮大な「弥勒菩薩の兜率天世界」が描かれた。「兜率天上の弥勒菩薩」の図像はガンダーラ浮彫に淵源し、そのあり様は『法華経』や『観弥勒経』からうかがえる。上生（死後、弥勒菩薩のいる兜率天に生まれる）と下生（将来、弥勒菩薩と共にこの世に下る）を合わせもつ弥勒信仰の造形は、インドには皆無で、初唐の敦煌莫高窟壁画に関連が窺えるものの、その様相は異なり、類稀れなものである。

東大仏天井にミスラ、西大仏天井に兜率天の弥勒菩薩が描かれたことは、バーミヤーンで

ミスラ信仰が王侯・貴族の間で流布していたこと、それが弥勒信仰に取って代わったことを示唆する。印欧言語学や神話学ではゾロアスター教のミスラと仏教の弥勒（マイトレーヤ）との密接な関係が有力視されており、バーミヤーン二大仏とその天井壁画はそれを物語るものとして興味深く、異文化を吸収し再生する仏教美術のダイナミズムに驚かされる。

バーミヤーンには二大仏の他に坐仏窟や、ドーム天井窟、ラテルネンデッケ天井窟、ヴォールト天井窟などの祠堂窟が多い。それらの天頂部には弥勒菩薩が描かれ、周囲に千仏が取り巻き、側壁にはしばしば「涅槃図」が表される。転輪聖王には千子があり、彼らはみな仏陀となるという（『賢劫経』）。涅槃図によって釈迦の入滅が表され、現在兜率天にいる天頂の弥勒菩薩への信仰が強調され、周囲の千仏によって弥勒下生後の仏陀の時間的継承と同時に、空間的な全世界（宇宙）における仏陀の遍満が意図される。正方形プラン・スキンチアーチをもつ鼓胴部・ドーム天井の構造をとる集中堂建築は、ササン朝ペルシアに起源をもち、ビザンティン聖堂に導入されると共に、中央アジアに伝わり、バーミヤーン祠堂窟ではそれが内部構造となり、天頂の弥勒菩薩を中心とした荘厳空間を現出する。それはおそらく瞑想や悔過の実践と関わったもので、密教の曼荼羅世界にも通じる。

６～８c の時代にエフタル、チュルクの勢力がヒンドゥークシュ山脈の北側と南側の広範囲な地域で、強力な勢力をもち、活発な交流がなされ（ソグド人の果たした役割も大きい）、ゾロアスター教・仏教・ヒンドゥー教は並存し、また様々に混淆し、特に仏教はソグディアナの地を除いて隆盛した。７～９c にイスラーム勢力の侵攻が北と南から始まり、イスラームに親和的であった仏教は次第にイスラームに取って代わられることになる。

拙稿参考文献

・「生き続けるバーミヤーン―大仏破壊の前とその後、現在・未来へ―」木俣元一・近本謙介編『宗教遺産テクスト学の創成』勉誠出版、2022 年、pp. 5-44.

・「バーミヤーン西大仏と仏龕壁画　弥勒信仰の生成と玄奘の見聞・信仰」近本謙介・影山悦子編『玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本』臨川書店、2023 年、pp. 107-186.

・「総論　アジアの中の日本―インド・ガンダーラからの視座―」宮治昭・肥田路美・板倉聖哲 責任編集『アジア仏教美術論集　東アジアⅦ　アジアの中の日本』中央公論美術出版、2023 年、pp. 3-72.

・「文明の十字路　ガンダーラとバーミヤン―光り輝く釈迦・転輪聖王・ミスラ・弥勒―」『文明の十字路　バーミヤン大仏の太陽神と弥勒信仰―ガンダーラから日本へ―』展覧会図録、龍谷大学龍谷ミュージアム・三井記念美術館、2024 年.